

Interview

大リーガーの夢に挑戦した 軟式野球選手 有村朋子さん

東京六大学野球に初の女性投手ジョディ・ハーラーがデビューしたり、高校野球でも女子部員が誕生するなど、野球は女性にとって、見るだけではなくプレーするものになりつつあるようです。しかし、女性スポーツの流れを見ると、プロ野球は日本や米国でもかつて女子プロ野球が人気を博していた時代があり、その後、消滅したという歴史を持っています。

1993年秋、女子プロ野球チーム「コロラド・シルバールブレッツ」（1Aノーザン・リーグ所属）が米国で結成されました。そして今年の初め、女性大リーガーをめざして、3人の日本人女性がシルバールブレッツの入団テストに挑戦しました。結果的に夢は叶えられなかったものの、3人の中で唯一、春季キャンプメンバーに選ばれた有村朋子さんにお話を伺いました。



米女子プロ野球チームシルバールブレッツとは

シルバールブレッツは1993年秋に、米ビール会社「クアーズ」が260万ドルを出資してつくった女子プロ野球チーム。監督はメジャーリーグで318勝をあげたフィル・ニークロ氏（元ブレーブス）が務めている。デビュー戦は94年5月8日、男子プロチーム、1Aのノーザンリーグオールスターズ戦で、0-19と大敗したが、男子チームと対戦した史上初の女子チームとなった。初勝利は同月27日。35歳以上の男子アマチュアチーム、フィールドロケッツを7-2で下した。チームは24人（平均年齢24歳）で構成され、職業は教師、学生などさまざまである。給料は1A選手の約4倍に相当する毎月4000ドルが支給されている。1年目の成績は6勝37敗。2年目は11勝33敗だった。1年目に比べると、チーム打率、チーム防御率などが大きく改善されたが、いまだに“野球の華”ホームランが出ていない。



●有村朋子さん

（撮影：高橋昭子）

1963年11月2日、埼玉・秩父市生まれ。埼玉・星野女子高等学校卒業。中学1年からソフトボールを始め、卒業後も実業団で活躍。現在は女子軟式野球チーム「東京スターズ」に所属している。昨年は全日本女子軟式野球選手権で準優勝を果たしている。様々な職種を経て、現在は海上コンテナの運転手。165cm、65kg。

ソフトボールでインターハイ、国体に出場

— 野球歴はもう長いんですか。

「（軟式）野球を始めたのは、5～6年前に『東京スターズ』に入ってから。知り合いに誘われて、見に行くと、入りたいと言ったら『はい、どうぞ』って。

ソフトボールは中学からやって、サードとかキャッチャーをしてました。高校では3年連続してインターハイに行くと、そのときはセカンドね。卒業して群馬の横尾製作所に入って全国制覇もしたんだけど、2年目のときに『あかぎ国体』が終わってチームが解散になったんだよね。それで岐阜のユニチカ垂井に行くと、何となく合わなくて1年で辞めちゃった」

— お父さんとか兄弟が野球が好きだったとか。

「兄弟は姉だけ。女らしいから私と一緒にしたら怒るよ。ハハハ。父は出張がちだったからあんまり関係ない。子供のころは男の子と一緒に道端のゴミ箱に向かってよくキャッチボールをした」

— ユニチカを辞められたあとはどうされたんですか。

「いろんな仕事をしたよ。川崎で自動販売機のルートセールスを2年でしょ。その間に大型免許を取って、それから武蔵村山でキャリアカーの運転。車を7台も積んで走るんだよ。それを4、5年やって、牽引の免許もついでにとって、トレーラーの運転をするようになった。最初はね、大きな車、運転するのがこわかったよ。それに今は女性ドライバーも増えてるけど、そのころはまだそ

んなにいなかったからね。それから立川で2年ほど、ブレハブ住宅の建設をやったんだ、(地下)足袋履いて。そのあと今の『スター物流』に来て海上コンテナの運転をするようになって3年目になる。あれ、これで年合ってるかな?」

— シルバーブレッツを受験しようと思ったきっかけは何ですか。

「鈴木(慶子)さんと納富(由紀子)さん(=いずれも女子軟式野球チーム・町田スパークラズ所属)が先に受けて、1次テストに合格したと新聞にあったから、私もやってみようかなと」

— お二人のことはよくご存じだったんですか。

「そう、よく試合で会ったりしてたから」

— あの二人がやれるなら私だって、と?

「(ちょっと考え)うん、少しはそういう気持ちあったかな、あの二人が受かるならって(笑)」

— 思い立ってから渡米するまで、何か準備をされましたか。

「全然。うまく見せようとは思ってなかったし、自分のできることしかできないわけだから、背伸びしてもしょうがないと思ってた」

自分では最後までいけるんじゃないかと……

— 受験されたのはいつですか。

「2月4日にロサンゼルスで受けました」

— テストの内容はどういうものでしたか。

「午前中は1次テストで、塁間を走ってタイムを計ると、内野・外野のノックを受けて、それからティーバッティング。ここで130人から22~23人に絞られて、午後が2次テスト。内野を希望してたのでノックを受けて、監督のニークロが投げてのバッティングのテスト」

— キャンプでの様子を教えてください。

「4月4日から5月3日まで、フロリダにあるボストン・レッドソックスのグラウンドでやったんだよね。私は4月25日に帰されちゃったけど。練習は10時から午後2時までだからそんなにキツくなかった。メニューは、最初のうちはキャッチボールから始めてノックを受けて、走ってという感じで、しばらくしてポジションごとの練習が始まった」

— ポジションは。

「最初はサードがやりたくてノックを受けてたんだけど、硬式のタマを持ったのがほとんど初めてだったんで、途中で肩を痛めちゃって。3日ぐらい練習できなくて、セカンドなら投げられるんじゃないかということになったらしくて、セカンドに移った」

— 硬球は初めてだったんですか。ボールが変わるとそんなに違うものですか。

「私は特に違和感は感じなかったんだけど、肩をダメにしたね。気をつけろって言われてたんだけど」

— キャンプの参加者はどれぐらいいましたか。

「スタートの時から51人で、2週間目までに10人から12人ぐらい落とされてたよ。向こうはシビアだよな、夜に言われて朝にはいないってやつだからね。それには残ったんだけど、そのあと4月25日までにもう10人減らされて、そこで落ちちゃった。自分では、いけるんじゃないかなとちょっと思ってたんだけどね。最終的には、24人まで絞ったんだって」

「痛めた肩はもう治った」と英語で言えなくて

— 落とされたときの気持ちはどうでした?

「本当は悔しくなくちゃいけないだろうけど、早く日本に帰りたいから。(笑)言葉もしゃべれないし、私、ご飯党だから、パンとかバスタとかハンバーグとか嫌なのね。そのときはけっこうサバサバしてた。

でも、戻ってきてから悔しくなった。肩さえ痛めなかったらと思うとね。もう治ってる、大丈夫って英語で言えなかったんだよね。それと、試合形式の練習になって、プレーしながら声を掛け合うのに、私だけコミュニケーションがとれないでしょう。言葉もハンディになっちゃって」

— 帰国してから何か変わったことはありましたか。

「特にない。でもTVに出たから、工作中、知らない人



にクラクション鳴らされて、うわっ何だろうと思うと、『TVに出てただろう』なんて言われたりした」

トラックの運転席にゴムをつけて筋力強化

— ふだん、トレーニングはどうされているんですか。「してないに等しいでしょうね。一つだけしてるのは、トラックの座席にゴムをつけてあって、渋滞してるときとかにそのゴムを引っ張って、肩のリハビリを兼ねて強化をしているぐらい」

— 「東京スターズ」の練習はどうなっていますか。

「してない」

— えっ？

「みんな年寄りだから疲れちゃうんだもん。ぶつつけ本番。試合の前にグラウンドに行っただけ」

— 以前、近藤信子さん（東京スターズ監督兼選手、元女子プロ野球選手）にインタビューをしたことがあるんです。その試合のとき、近藤さんが何イニングか投げられてました。

「そのとき、キャッチャーしてたの、きつと私だよ。私なら近藤さんのタマ、10割の確率で打てるんだけどな。

あ、近藤さんがこれ読んだらマズいな、ハッハハ」

— 近藤さんにも、この機関紙、送りますからね。東京スターズではキャッチャーをされているんですね。

「あんまりやりたくないんだけどね。いまは他にキャッチャーの子が入ったから、内野もやってる。でも本当はピッチャーがやりたいんだ」

— 「東京スターズ」以外に所属されているチームはありますか。

「地元の『保土ヶ谷サワーズ』っていうママさんソフトボールのチームに入れてもらってる。こっちは40代、50代の人を中心に、やっぱり練習はしないで試合だけ。横浜ではけっこう強いんですよ。ママさんでなければだめなので、（独身の）私は区レベルの試合にしか出られないけどね。あとは、会社の野球部にも入ってるよ。こっちは練習もちょっとやってるのかな。試合が日曜日のので、他の試合が重ならない限り出るようにしてる」

高校に女子の硬式野球チームを

— 東京六大学野球にハーラーがデビューしたり、高校野球に女子生徒が登場したりと、女性の野球熱が高まっ

ていますが、そのことについてはどう思われますか。

「いいんじゃないですか。でも、高校で男子と一緒にやるのは難しいと思う。小・中学校なら何とかなくても、高校ぐらいになるとやっぱり男子には体力的についていけないでし



よう。女子だけでやるんだったらいいけど、男子と一緒にやるっていうのは、根本的にちょっと違うと思う。大学では女子の軟式野球チームができてきているから、高校でも女子の、それも硬式のチームができてくればいいと思うね」

— 有村さんのこれからについては？

「まず、安全運転。（笑）仕事と野球の割合は、自分の中では6：4か7：3ぐらいなんだ。野球はチャンスがあれば、またチャレンジするかもという程度。鈴木さんは今、フロリダのリーグ（全米ウイメンズ・ベースボール・リーグ）でプレーしてる。ノンプロの社会人チームみたいなもんで、ギャラが出るわけじゃないからね。偉いよね、そこまで好きだってことだからさ。でも私はちょっとね。いまはふだんの試合を楽しくやりたいというのと、一つでも多く勝ちたいということかな。近藤さんといういいお手本がいるから、私も体の続く限りやりたいよね」

◇

「職場でも、同僚には女だと思われてないから、ハッハハハ」。「趣味は、最近は年とったせい何か何もないなあ。仕事のあと、仲間と飲みに行ったり、パチンコをするくらいかな」。外見はちょっと男っぽくたくましい有村さんですが、その一方で、笑った目元がとてもやさしいのが印象的でした。朗らかに語るその言葉の端々にも、女性ならではの“かわいらしさ”を垣間見せてもらったような気がしました。（9月28日取材・聞き手／WSFジャパン・スタッフライター 山本尚子）